

かけ橋

まだ見ぬ君へ…



△EMボカシづくりに励む
小規模授産所ふじひろみの皆さん

生ごみもEMボカシで

優秀な有機肥料に

これから出会う友達、恋人、そしてこれからこの世に生を受ける愛の結晶。私たちは、今ある富士市の自然や文化をもっと豊かなものにして、まだ見ぬ君へ贈りたい。
そんな思いがこの「かけ橋」という言葉に込められています。このコーナーでは環境、文化、福祉などをテーマに市民の皆さんの「熱い思い」をお届けします。

毎日、台所から出る生ごみ。臭くて汚い生ごみもEMボカシという発酵堆肥材を使うと優秀な有機肥料に変わり、野菜をおいしく育てます。

EMとは作物をつくるのに有効な乳酸菌や酵母菌など、八十種以上の微生物群を選び出して複合した培養液のこと。このEMをもみ殻や米ぬか、糖みつと混ぜてボカシという発酵堆肥材をつくるのです。

小規模授産所ふじひろみでは、七人



EMボカシに関する問い合わせは
環境衛生課 内線2050

の通所生が協力しあってEMボカシをつくっています。まず、もみ殻などにEMをよく混ぜ合わせ、約一週間寝かせます。それを二、三日乾燥させ、袋詰めすればでき上がり。市内で「販売用」EMボカシをつくっているのは、小規模授産所ふじひろみだけです。各区の婦人会や花の会など、自主的につくっているグループもふえています。さて、EMボカシを使って生ごみから有機肥料をつくる方法はどういうと、これが実に簡単。しっかり水切りした生ごみを密閉容器に入れ、EMボカシをまんべんなく振りかけます。あとは容器がいっぱいになるまで繰り返し、いっぱいになったら密閉して直射日光の当たらない場所で発酵させるだけ。生ゴミを発酵させてつくった有機肥料を使うと、キュウリは数多く、トマトは甘く、バラは花の色が濃くなるそうです。また、容器の底にたまった液は薄めて、水洗トイレや下水に流すとぬめりや悪臭がなくなります。EMボカシは生ごみの減量化だけでなく、生活を豊かにし、環境浄化に役立っています。

気軽に「駐在さん」と呼んでほしい

鈴木郁朗さん

(原田)

明 治二十三年、原田村に駐在所の駐在さん。鈴木さんが原田へ赴任した七年前は、奥さんと二人だけだったのが、今では二人の子供との四人家族。もうすっかり地域になじみ、鈴木さん自身、住民として地域の活動にも積極的に参加しています。

敬礼しながら駐在所の前を通り過ぎる学校帰りの子供たちに「お帰り」と笑顔で声をかける鈴木さん。ほとんどの子供の顔と名前を覚えていいます。



「駐在所といえば、山や川が見えるような牧歌的な風景を思い浮かべませんか。ところが原田地区は住宅が多く、昼間はお年寄りや子供くらいしかいません。子供たちは、犯罪を防ぐための有力な協力者なのです」

鈴 木さんが駐在所発行のミニ広報紙づくりに力を入れていられるのも、地域に溶け込んだ身近な存在として、気軽に「駐在さん」と呼んでほしいという思いから。富士署ミニ広報紙コンクールで第一位になった紙面からは、実際に起きたエピソードを織りまぜながら、警察活動への理解と防犯の協力を呼びかける「駐在さん」の熱意がひしひしと伝わります。

「湧水の澄んだ水のように、心の清い人が多く住んでいる土地でも犯罪は起こります。駐在所は、地域社会の治安を住民とともに手を携えて解決する生活安全センターなのです」

